

タイプライターからパソコンへ

赤谷慶子

初めてタイプライターに遭遇したるは、一九六〇年代後半なり。大學卒業後、外資系の企業に就職せむと考へし我に、女子として就職を有利ならしめむためには最低限速記とタイプの免許を取得せよとの父の進言にて、學業の合間に速記者養成學校に通ひし頃なり。當時のタイプライターは所謂手動にて、改行の際は勢ひよく改行器具を左手にて、左から右へバシッとボールを放り出すような作業を必要とす。假にもキーを叩き間違へたる場合は、間違へたる箇所にカーソルを戻し、消しゴムにて文字を消し、その上に正しき文字を打ち込む。同じ場所にキーを持つて行くは甚だしき難儀にて、如何に綺麗に修正するかは、その打ち手の技の見せ所にてぞありける。我は一分に一五〇文字を叩く能力を得、最上級の免許取得してあり。然りながら初心者にて間違へたるキーを叩きたる際には、修正するに時間かかりし事も事實なり。世界銀行の東京事務所就職して一年後にIBM社より電動タイプライターなるもの出現。畫期的なる機械にて、修正は間違ひし文字までカーソルバックせしめ、同じ文字打ち込めば間違ひし文字は白くなる。その上に更に正しき文字を打ち込めば良く、作業は著しく短縮しき。さはさりながら、言葉の挿入等の作業はこれまでと同様に不可能にて、全文打ち直す作業を要せり。全ての文章を打ち終はり、一行脱落せるを見出したる折には愕然とす。我が上司は米國人の元ジャーナリストにて物凄い勢ひにて、両手の人差し指のみにて手動タイプライターを駆使し、間違ふれば則ち「すまぬが打ち直されたし」と原稿を持ち來たれり。彼は當時のマクナマラ總裁にアジアや日本の政治經濟狀況を極秘裏に報告する任務を擔つてをり、内容は非常に興味深く面白かりき。この人は秀才にて十六歳にて大學に入學し、その後ビジネスウイークなどの編輯長を歴任し、本田宗一郎の事を英語で初めて執筆したる人として當時は有名なりき。終戦直後日本にをり、裏の世界の事情に精通するありて、その話の愉快なること類なし。彼はリベラルにて戦争を嫌ひ、第二次大戦中はパリにおいて救急車の運轉手をしてありき。今も元氣にて時々メールを下さるるも、一五年程前から非常に右寄りの發言多くなり、人間齡よはひを重ぬれば右傾化するのかと彼の言動を興味深く追ひてあり。

次に出現したるはワードプロセッサ。パソコンまでの機能は持ち合はせてをらずといへども、取消や挿入等の作業はタイプライターとは全く異なり、簡単に作業すること可能にて、文書を作成する人たちにとりては畫期的なる開發なりと、大層喜ばれたりき。この頃、朝日新聞は今まで手書きなりし記事原稿をワードプロセッサにて作成し、新聞制作工程を大々に短縮・早めるために新しき制度導入せむとて、本社を有樂町から築地に移轉せり。吾は丁度有樂町から築地に移轉する年の一月に入社決まり、その年の十月大企業の引越し經驗す。海外からのVIPや外國人特派員に對し、制作工程を英語にて説明する業務もあり、必死に研究せり。何臺ものスーパーコンピューター置かれし部屋は常に溫度一定に保たれ、寒かりき。記者たちは手書きからパソコンを使ふこと求められ、彼らも必至に格闘せり。ファックスの普及廣がり、それまで社旗をなびかせ、各記者クラブから本

社、本社から各記者クラブへ猛スピードにて走りたりしオートバイの姿も消えたり。

築地移轉から一年後、朝日新聞はニューヨークタイムズと提携し、英文のニュースを配信する事となり、英文記事の作成せる記者たちの養成始まりき。我もその一人にて、特殊なワードプロセッサーの特訓を受けたりき。記事完成後、ニューヨークタイムズの配信網に載せて世界中に配信せられたり。ボタン一つにて築地からニューヨークへ送る事可能な機械なり。養成期間中アサヒブニングニュースの編輯局長をしたる人、このチームの一員になりし。彼は、機械苦手にて、何のキーを押すのか不明なりしが、彼の機械は頻繁にビーツという警告音とともに何度も停止したりき。研修後この機械を駆使し、多くの記事海外へ送られたり。

今ではすべてのワードプロセッサーはパソコンに取って代はられたり。インターネット普及により、今後は如何にファイヤーウォールを高くし、ウイルスやハッカー等から防禦せむや、すなはち大なる課題とこそはなるらめ。

(平成二十九年九月二十八日受附)